

続 教育長だより



鹿児島県三島村教育委員会
教育長

徳晃園之室



1958年生まれ。鹿児島大学教育学部卒業後、鹿児島県の教員として県内の小学校、鹿児島市教委主任指導主事、大島教育事務所長、鹿児島市立上小学校長を経て現職。全国一離島の多い鹿児島県で十年間離島教育に従事し、鹿児島県小学校長会会長を務めた。

雄大な桜島を眺めながら、鹿児島市から出港したフェリーが2時間ほどゆっくりと錦江湾を抜けて、さらに1時間ほど進むと小さな島が現れます。まるでゴルフ場を切り取ったようなその島に近付いてみると、島を覆っていた緑は芝ではなく竹だったことが分かります。名は体を表すのとおり「竹島」は、三島村の入口の島です。竹島から西に14km進むと「硫黄島」、さらに36km離れて「黒島」が現れます。正に看板に偽りなし。硫黄島は火山が火を噴き数多くの伝説が残る島。黒島は豊かな森林に覆われ「ミニ屋久島」とも称されます。地図をよく見ないと見落としてしまうようなこの3つの島を合わせて三島村です。

全く違う表情を見せながら横にわくわく並ぶ3つの島ですが、これらの島は日本で最も新しい巨大噴火の生々しい痕跡であり、日本ジオパークに登録され、独自の文化・信仰形態・伝説が語り継がれています。人口は400名足らず。交通手段は週4便の定期船のみ。村役場や教育委員会が島内ではなく鹿児島市にある…など、なかなか皆さんにはにわかには想像しがたい村ではないでしょうか。

子どもたちは、村内4つの義務教育学校に約80名の児童生徒が通っています。全児童生徒の約40%は全国各地からやってきた山村留学生、約30%は教職員の子どもたちです。

この小さな離島へき地の村の教育長を務める私が、「教育長だより」を1年間連載することとなりました。ある意味シュールともいえる我が村の状況を考えると皆さんの参考になるものはないのかもしれないかもしれません。しかし、この村の教育づくりに当たっていると村は国の縮図であるということをつくづく感じる時があります。

日本の原風景や文化が残る離島における教育には、「教育の原点」があるとよくいわれます。私がいつも先生方にお話ししているのは、「小さな学校で子どもたちに力をつけることができたとしても、大きな学校でできるとは限らない。でも、小さな学校の子どもたちにすら力をつけることができなかった教師が、大きな学校の子どもたちに力をつけることができるだろうか。」ということです。このことが、離島や山村の小さな学校が「教育の原点」といわれる一つの真理ではないでしょうか。

産業の発展が困難な離島の村の未来を拓く一筋の光は「教育の島」にすることです。まあ御託を並べずともこの村の学校教育づくりは面白いのです。このワクワク感をお届けできたらと思っています。



教育長だより

鹿児島県三島村教育委員会
教育長

室之園晃徳



1958年生まれ。鹿児島大学教育学部卒業後、鹿児島県の教員として県内の小学校、鹿児島市教委主任指導主事、大島教育事務所長、鹿児島市立田上小学校長を経て現職。全国一離島の多い鹿児島県で十年間離島教育に従事し、鹿児島県小学校長会会長も務めた。

前回、「教育の原点」ということについて少しお話ししましたが、「〇〇は教育の原点である」という表現は、離島へき地や山間部の小さな学校の教育に限らず、特別支援教育や家庭教育でも同じようにいわれます。これらに共通していることは、子ども一人一人をよく見つめ、理解し、その子の成長のためになし得る最善を尽くさなければならないということです。そして「原点にかえる」ということは、源流に遡って物事の本質や基本をもう一度見極めるために出発点にかえるということであり、「初心忘るべからず」という教えにつながるものでしょう。

夏休みにキャンプ活動などで島を訪れた人が、島の子どもたちの朝のラジオ体操風景を見て「夏休みのラジオ体操をこんなに真面目にやっている中学生を初めて見ました。」と興奮して語ってきます。大したことはありませんが、こんな一つ一つの小さな感動や驚きが、教師の純粋な気持ちを引き起こさせてくれます。本当の兄弟ではなくても「〇〇兄ちゃん」「〇〇姉ちゃん」と呼び合い、家族のように面倒を見合う姿。連続長縄跳びで何回引っ掛かっても挑戦し続ける子どもと何回失敗してもそれを責めずに見守る子どもたち。ある会場で、誰も見ていない状況の中で、入口に散乱していたたくさんの履物をきちっと並べている女の子に偶然遭遇したときは、その美しい風景が神々しい空気に包まれているような感覚を覚えました。まさしく「心の洗濯」という表現がどんぴしゃりです。

「自分はなぜ教師になりたかったのか」と、純粋なあの頃の気持ちに立ち返って考えることは、自分が教師として落ち込んだり判断に迷ったりしたとき解決のヒントを与えてくれます。「自分はどんな教師になりたかったのか」「自分はどんな授業をしたかったのか」悩んだときの判断基準は、結局他人ではなく自分自身に問いかけたときに見えてくるものです。今、多くの教師たちが、教育の新しいキーワードや予測不能な問題に出会うたびに戸惑い、右に行ったり左に行ったり大きく軸がぶれ始め、ついには軸を見失っているような気がします。仕事や時間に追われる日々が続く、自分の現状と課題が客観的に見えなくなるとそこで成長は止まります。出発点の初々しい気持ちや心構えとなる軸が折れて、優先順位が狂っていないか。それを振り返る基準が「原点」です。

物事が複雑になってきたときは原点にかえってみる。このシリーズで何を伝えようか迷っていたのですが、「原点回帰」をテーマとして、心の洗濯になる話もできたらと思っています。

働き方改革が目的化すると教員の質が低下するという懸念がありますが、働き方の改善によって生まれた余裕は、「原点」を取り戻す余裕になってほしいものです。心が感じて動いたときに心のエネルギーも満たされていくでしょう。

ボッカンボッカーン
三島村の三つの島が
どうやってできたか知ってる？
私の住んでる黒島は
百万年も前の大昔
おっきな噴火で生まれたよ
おとなりの竹島と硫黄島も
大大大噴火で生まれたよ
三つの島は海のずうっとずっと
下のところで実はつながってる
(小3児童)



教育長だより

鹿児島県三島村教育委員会
教育長

室之園晃徳



1958年生まれ。鹿児島大学教育学部卒業後、鹿児島県の教員として県内の小学校、鹿児島市教委主任指導主事、大島教育事務所長、鹿児島市立田上小学校長を経て現職。全国一離島の学校数が多い鹿児島県で十年間離島教育に従事し、鹿児島県小学校長会会長も務めた。

「ガイド学習」という言葉をご存じでしょうか。教育用語ではありますが、複式学級があるような極小規模校に勤めた経験のある教師でなければ聞き覚えのない言葉かもしれません。実際、鹿児島県のように離島へき地小規模校の多い県の教師であっても、「ガイド学習って何ですか？」と疑問をもつ教師に結構お会いします。「ガイド学習」とは、「間接指導の際、子どもの中から選ばれたガイド（学習の案内役）が教師の指導の下、学習進行計画に従いリードし、相互に協力したり助け合ったりしながら学習を進める学習形態」です。こう説明すると次に「間接指導って何ですか？」という質問が返ってきます。

複式学級には、教師が指導する「直接指導」と、子どもだけで学習を進める「間接指導」の場があります。さらに、教師が直接指導と間接指導を交互に移動することを「わたり（デリバリー）」、指導の段階や時間配分を学年別にずらして組み合わせることを「ずらし（シフト）」といいます。また、指導計画も一本案、二本案、折衷案などの種類があり、極小規模校ならではの業界用語が存在するのです。

小さな学校の子どもたちは、概して明るく素直で純朴です。異年齢集団での交流が密であり、教児一体となったふれあいの場面も多く、強い信頼関係が自然と築かれていく面があります。個に応じた指導が充実するというか、個に応じた指導でなければ学習が成り立ちません。このように小さな学校には多くのよさや強みがあります。しかしその反面、多様なものの見方・考え方を通した練り合い高め合う学習活動などは、なかなか難しいものがあります。限られた人間関係の中で向上心や競争心が育っているか、大集団の中に行ってもたくましく生き抜く力が身に付いているか、教師は常に将来の子どもの姿を思い描く想像力が必要です。

小さな学校の子どもたちは、授業で休まる暇がありません。先生方がつい熱が入って、息つく暇もないピンポンのような授業になってしまうと、へとへとになってしまいます。教師には、これまで学んできた教え方にとらわれず、一人一人の個性に合わせた指導の工夫こそが何よりも重要なのです。

島にリターンしてきた青年から聞いた話ですが、「県本土の高校に進学したら、クラスの人数が多いので授業中に寝ることができたんです。島の学校ではそんなことは絶対無理だったので、なんかうれしくて授業中はいつも寝てたんですよ。」こんな笑い話のような話ですが、私は「さもありなん」と妙に合点がいました。こんな体験談も一笑に付さず、指導法改善のヒントにして、個に応じた指導の実践に最適な小規模校の教育を、未来の教育モデルの一つに進化させたいと思っています。



複式学級の様子



ガイド学習の様子